



C1907『光もとめて』

[今月の聖書]

イエスは、また人々に語ってこう言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。(ヨハネ 8:12)

「光は正しい者のために暗黒の中にもあらわれる。主は恵み深く、あわれみに満ち、正しくいらせられる。」

(詩篇 112:4)

「主を仰ぎ見て、光を得よ、そうすれば、あなたがたは、恥じて顔を赤くすることはない。この苦しむ者が呼ばわったとき、主は聞いて、すべての悩みから救い出された。」(詩篇 34:5,6)

「わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。」(第一ヨハネ 1:5,7)

そこでイエスは彼らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。イエスはこれらのことを話してから、そこを立ち去って、彼らから身をお隠しになった。(ヨハネ 12:35,36)

「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上へのぼったから。見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあられる。もろもろの国は、あなたの光に来、もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに来る。」(イザヤ 60:1-3)

「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です。」(詩篇 119:105)

お元気でお過ごしでしょうか。今月は「光求めて」というテーマでお話しいたします。イエス・キリストは「私は世の光である」と言われました。そのキリストの光を求めつつも、なかなか光に到達しない現実があります。クリスチャンとなりましてもしばしば、不信仰が心をよぎり、真の光が見えなくなる経験をいたします。近年高齢化社会が進んでいるために、熱心な信仰者であっても、信仰の灯が消え、はっきりとキリストの救いを告白できないこともあります。クリスチャン作家阪田寛夫は母の死に向かう姿を見ながら「土の器」を書き、第72回芥川賞を授与されました。人生の暗闇は老いばかりではなく、①罪の意識②経済的能力的肉体的弱さ③愛の欠如、特に社会的冷淡さ④死の恐怖などを上げることができます。「光は正しいもののために暗黒の中にも現れる。」(詩篇 112:4) この詩篇はハガイとゼカリヤによって書かれたのではないかとされています。正しい生き方をしようとするときに受ける攻撃の中で体験する暗闇です。ここで言う光は「神ご自身」であります。人生の暗闇の真っ只中で光である神が現れると言う約束です。単に試練がないように祈るのではなく、試練の最中にあっても神の光を見ることが出来るようにと祈るべきであります。それは信仰の祈りです。神の祝福をお祈りいたします。

(お知らせ)

* 地区集会のご案内

7月2日(火) 13:30 広島集会(広島駅北口 TKP ガーデンシティプレミアム 3C)

7月9日(火) 13:00 CFI 横浜集会(福音喫茶メリー Tel 045-231-6773)

7月17日(水) 11:00 水曜礼拝、14:00 ジョイコーラス(自由が丘チャペル)

7月18日(木) 11:00 バイブルアカデミー(受講料3,000円)

* 7月11日(木) 19:00 東日本大震災復興支援超教派一致祈祷会(淀橋教会)

「土の器」

クリスチャン作家阪田寛夫（ひろお）（一九二五〜）は一九七五年（昭和五〇）に作品「土の器」で第七十二回芥川賞を授与された。

「この作品は熱心なキリスト者の母の死を素材として人間の強さと弱さを描いたものである。母は七〇才を過ぎて、教会のオルガニストや婦人矯風会の幹部などとして多方面にわたる活動家であった。おしゃれや他人の噂など、世俗の些細なことには全く関心を示さず、むしろ厳しく拒む生き方を貫いた人であった。そして、手の骨が折れてもなおオルガンを弾き続ける特異な精神力を持った「強い人」であった。そんな強い老婆が膵臓癌で倒れてしまう。それでも初めの頃は激痛の苦しさを訴えず、鎮痛剤も拒み、看護する肉親をてこずらせる。こんな時でも「いつも私たちは神のなさをすることを肯定して、神をほめることを忘れてはならない」と言い切る老信徒であった。

しかし、癌細胞に冒されるにつれて、この母が痛みを訴え鎮痛剤を受けつけるようになった時、周りの者たちは「やっと母は人間らしくなった」と言って喜んだ。やがて、ほけてきて肉親に敬語を使ったり、一日何回も打つ点滴注射の苦痛にさいなまれ「腕や足に四六時中さいこまれる点滴のパイプと尿道から導き出されるビニールパイプの間に、母の体はちょうど逆の濾過器みたいに置かれている」状態になってしまう。作者は「いまの母は人間からグロテスクな物に変わり始めている」と感じざ

るをえなかった。そしてピアノの腹の下に頭を突っ込んで「何か母に喜びを与えて下さい」と久しぶりに祈る。人間らしい個性も、あの気丈夫な精神力もすっかり喪失した母は、結局悲惨な人間濾過器の物体のまま消えてゆくと思われた。しかし、その母は「ああ、そこらじゅう、うれし、うれし」と言い「どうもありがとう」と読める唇を動かして、たくさん、小さく笑って死んでゆく。作者は「容態が悪化して、母の存在が濾過器そのものに近づけば近づくほど慰めているのは私ではなく、かえって母のほうだという感じが強くなってきた」と言っている。あの強い人間としての母が、癌という病魔の前に打ちのめされ、そこにはかない土の器でしかなかった人間のもろさ、弱さをまざまざと見た作者は、その母が土の器の中に持っているただものではない「何か」を発見したのだろう。作者は人間の外側を見て「強い母」を知っていた。そして今度は癌を患った母を見て「弱い母」を知った。しかし、その強くて弱い外側の器を見ていた時は、本当の母の姿が見えていなかったのである。母の死に直面して初めて母という土の器の内面を見た。人間の外側を見て判断した価値観がここで崩れてしまった。そして見えないものの中に隠された「何か」に気づかされたのである」（川崎正明）

キリスト教逸話例話集

高野勝夫編著

◇投稿募集のご案内◇

皆様の原稿をお待ちしています。

毎月のCFIニュースレターの裏面に順次掲載させていただきたいと思います。

- ・すくい体験のあかし
- ・個人的願いや祈り
- ・信仰生活のあかし
- ・主にある交わりのレポート
- ・最近気づいたことや発見したみことば
- ・CFIメッセージの感想や教えられたこと

何でも結構です。800字程度で、手紙、ファックスかメールで送ってくだされば幸いです。